

『オラン・キタ』

映画に見るサバの多民族社会

山本博之

ボルネオ島のサバ州とサラワク州は、マレーシアの一員ではあるが、半島部と異なる独自の地元文化が育っている。何でも民族別の半島部と違い、サバでは民族や国籍の違いは大きな意味を持たない。それをよく表すのがテレムービーだ。ビデオCDの形で販売される映画で、サバでは2002年ごろから地元制作のテレムービーが大流行している。

サバが生んだ天才喜劇俳優アブバカル・エラとその相棒マット・コンゴの黄金コンビが出演する一連の作品が特に人気が高く、なかでも『オラン・キタ』(Orang Kita)と『不法恋愛』(PTI, Percintaan Tanpa Izin)は続編が作られているほどである。これらの映画が人気を博した背景には、マレー人ばかりの半島部のマレー映画と違って、民族や国籍が違う人々がともに暮らすサバ社会のあり方がよく描かれていることがある。

髪型が特徴的なアブバカル・エラ(アンバル役)は〈陸の民〉だ。伝統的に内陸部に住んで稲作や狩猟採集を行ってきた人々で、カダザンドゥスン系と呼ばれる。多くは精霊信仰だが、19世紀末にキリスト教、1940年代以降にイスラム教が一部で受け入れられた。

マット・コンゴ(オム役)は〈海の民〉だ。伝統的に沿岸部に住んで漁業や交易を行い、イスラム教を信仰している。19世紀末に国境線が引かれてサバが近隣諸国と切り離されると、〈海の民〉は複数の国にまたがって分布することになった。そのため、サバで生まれても外国に親戚がいるために外来移民とみられることもある。

〈陸の民〉と〈海の民〉は、古くは市場での交易から独立後の政党結成まで、常にお互いの協力を意識してきた。サバを取り巻く政治状況によっては、〈陸の民〉と〈海

の民〉の力のバランスが一時的に崩れ、対立が強調されることもある。しかし、〈陸の民〉と〈海の民〉が手を取り合って(むしろ〈陸の民〉が〈海の民〉に助けられて)町に出て暮らす様子を描き、それに「オラン・キタ」(私たち)というタイトルをつけたことに、半島部のような民族別の社会を作らなかったサバの人々の思いが伝わってくる。

『オラン・キタ』の姉妹版にあたる『不法恋愛』では、〈陸の民〉アブバカル・エラの娘と〈海の民〉マット・コンゴの甥が恋に落ちる。実は甥は不法入国者で、警察の手がおよぶ前に、いずれサバに戻ると約束して国に帰っていく。続編は、正規の方法でサバに戻って2人が結ばれる話らしい。半島部だったら異なる宗教間の結婚は親戚中大騒ぎになるはずだが、サバでは民族や宗教はもちろんのこと国民であるかないかさえ重要ではない。正規の手続きを踏めば誰でも仲間として暖かく受け入れるサバの様子がよく表れている。

サバの映画は週末にサバを訪れて日曜マーケットで探すのがベストだが、時間がない人は、クアラルンプールのコタ・ラヤにある「ビクトリア」という代理店でも手に入る。[2009.3.12]

(やまもと・ひろゆき 京都大学)